

光明第十一号

様

□ 今日(きょう)は十一月廿九日(にじゅうくにち)で御座(ござ)います。原稿(げんこう)を書き初め(はじめて)です。それでも、どうしても、おくれます。この月(つき)は大へん忙しい月(つき)でした。毎夜(まいや)の仕事(しごと)までありましたし、運動会(うんどうかい)がありますので、それはそれはいそがしい日(ひ)を見ました。

ああ、この月(つき)もおくれると思え(おも)ば立つても坐(ま)つてもいられない様な気(き)がいたしました。私(わたし)がこんなことをしているのがまちがいかしらんとさえ思う(おも)うことがありました。しかし、やはり私は苦(くる)しまねばならないのだ。私の様な働(はたら)きのない智慧(ちゐ)のない者(もの)には、せめて、苦(くる)しい思(おも)いをし、この骨(ほね)とこの血(ち)のかれるまでただ努力(どりょく)し、社会奉仕(しゃかいほうじ)に一時(ひととき)でも多く使(つか)うことがやはり私の信仰生活(しんぎょうせいかつ)だと、新しい勇気(ゆうき)が出て来る(くる)のでした。

□ 万物凋落(ばんぶつてうらく)の冬(ふゆ)は来(き)ても悲(かな)しいこと(こと)もありません。一日(いちにち)一日(いちにち)と青春(せいしゅん)は失(うし)なわれても、淋(さび)しいと思(おも)いません。私(わたし)たちの一日(いちにち)一日(いちにち)の内的充実(ないてきじつ)の自我实现(じがじつげん)の生活(せいかつ)は、ひいて、宇宙永劫(うちゅうえいきゃく)の精神(せいしん)として的一部分(いちぶぶん)であります。私(わたし)たちは寒い朝(あさ)も暑い昼(ひる)も、不運(ふえん)な時(とき)も、孤独(こどく)な時(とき)も、病氣(びやうき)の時(とき)も、死(し)する時(とき)も、ただ感謝(かんしゃ)しなければなりません。私(わたし)たちは貧(ひん)しいのを欺(か)いて富(と)ませて下(くだ)さいと神(かみ)に祈(いの)ってはなりません。不幸(ふこう)を悲(かな)しんで人生(じんせい)を駄目(だめ)だとあきらめたり、八卦(はくぱ)や易(えい)にたよったり、僥倖(りやうじやう)をあてにしたりしてはなりません。ただ私(わたし)たちの為(ため)すべきこと(こと)だけをしていなければなりません。これが信仰(しんぎょう)の生活(せいかつ)であります。

我は如何なるものぞ (三)

(4) 靈魂と肉体

現代種々な科学の進歩と共に、物質を重んじて精神を軽んずる様な傾向が増して来ました。特に物質的科学的進歩につれて、事実を認めて、精神の存在を疑い、物質以外に世界はない様な考えが多くなった様に思います。観察や実験によつて宇宙の必然的な法則を見出すことにつとめている科学者にとつては、そんなに見えるかも知らないけれども、如何に物質文明は進んでも、物質はやはり物質であつて、精神ではないと考えます。否宇宙は心が主であつて、物質は従であると信じます。唯物論者は、宇宙は物質であると申すけれども、唯心論を正しい真理だと信ずる私はやはり宇宙は心である。精神が根本であると信ずるのであります。したがつて私という人間についても心が本であつて、心がある故に肉体があると思います。

もちろん人間という形を備えていて、人間という形、肉体という物質として存在する以上、体と心とは別なものとして考えることは出来ないで、体の様子によつて精神に色々な關係を及ぼします。体が健全であれば、精神も健全であり、体が病氣であれば、精神も鈍ります。体が亡びれば精神もなくなる様に見えます。体と精神は別々に離しては、考えられないものであります。体がある故に精神があり、精神がある故に体があります。ですから、その昔、身には難行苦行を續けて、一切の苦をいとわず、食をたち、欲を抑え、身を亡して、心の修養につとめようとした教えなどは大変な間違いだと思ひます。私たちは精神の修養と共に、体を養わなければなりません。肉体の衰弱は精神の衰弱であります。

しかしながら、精神もまた体を支配いたします。私は、よく催眠術をかけていた事があります。催眠術をかけた人に「あなたに酒を飲します。」と言つて、水を飲せておけば、その人は酒を飲んだ様に酔つて来ます。顔も真赤になつて来ます。もし、「あなたは、目が覚めてから、歩くことが出来ません」と言つておけば、歩くことが出来ません。飲まされたのは、酒ではなくて水であります。水に体が酔うはずはないと言つても、やはり酔つています。精神はかくの如く身体を支配いたします。

体と精神は離すことの出来ない關係を持つています。けれども体はやはり物質であつて、精神は体を人として働かす所の体以上のものと考えたい。私たち人間の価値は体の大小強弱よりも、精神の活動如何によつて定めます。かつまた体の活動には一定の限りがあります。けれども、精神の作用には限りがありません。又精神の体を支配する事は、体が精神を左右する以上であります。

けだし、我々人間の心は全ての生物の持つている心の内で最も優れた心であります。我々の心には進歩があります。我々人間の心のみ進歩発達があります。「我の尊さ」はここにあります。

私の心は社会の心であります。社会は時々刻々に進んで行きます。一分も休まないで進歩して行きます。私の心もまたこの社会と共に進んで行きます。しかして社会は永遠に進んで行きます。限りなく発達して行きます。私たちの心もこの社会と共に永遠に進んで行かなければなりません。

私たちの肉体は亡んでも私たちの精神は次の時代に残ります。社会のあらん限り私たちの精神は生きて行きます。社会は進歩しつつ残って行くが故に、私たちの精神は残って行きます。この意味から我々の精神は不滅であります。（霊魂と肉体についてはまた書きたいが紙の都合でこれでおく）

怒の黒雲に真如の光は隠れ
駘蕩たる春の光に万物は幸福に生きる

冷たい御殿より温い小屋

美しく着飾った奥様が奇麗な御殿の中で、妻を妻として愛してくれない夫の帰りの遅いのを待っています。夜更けて帰って来た夫は、酒で荒んだ荒々しい言葉で奥様をおこりちらかし、待っていた甲斐もなく、寢床に這入った奥様は流れ出る涙で枕を濡らすのでした。

まだほの暗い内から、山の麓の小さい家には明い焚火が障子にうつっています。夫は牛に草をやったり水をやったりしています。妻は台所で茶をわかしたり、飯をたいたりしています。二つ三つ空に星が輝いている時、夫婦連れで、車を挽いて出て行きました。夫は妻にむかつて、「お前に辛苦さすのが気の毒だ。辛いだろう。」と言いました。妻は夫に「二人で苦勞して、十年の間には、今の借金を皆払って、その上百円の貯金が出る様に致しましょう。」と申しました。夕べの煙が家々の風呂屋から出て、鶏が小屋に寝た頃に、夫婦は家に帰りました。湯をつかつて、爐の側で夫婦唯二人食事をします。膳の上にならぶものは、肉や魚の美味ではなくて、野菜の煮物でした。それでも体が健康で、働く身には、一日の苦を忘れるには十分でした。新しくも立派でもないが、しかし、奇麗に洗われた蒲団の中には、二つの安らかな躰が静かに聞こえています。

若い妻は遅く商用の用事で帰って来た夫に向かって、儀式一片の挨拶をしたあとで、「何時までぶらぶらしていたのです。待つ身にもなつて、さつきと早く帰つたらいいでしょう。どこにいたのです。」と言いました。「どこに行つていても勝手よ。出たらおそくなることもあるよ。グズグズ言わないで飯なりと出せ。」二人は別々の思いに箸を黙つて持つて、食べています。妻は「ね、あなたこの間言つた帯は買つて来てくれましたか。」と申しますと「また始まつた。帯々と何時も言う女だ。物の高いにそんなもの買えるかい。」「だつて、一本買つて下さつてもいいでしょう。妾の様に、何時も古い同じ帯一本しかないものは外にはありやせん。三年に一本、五年に一本は買つてくれてもいいでしょう。隣の小母さんなんか、毎年新しいのを買つて貰われる。」「やかましい。家に居て、遊んでばかりいるくせに、そんなに隣がよかつたら、隣に行けや。」「何ですつて、甲斐性のない男ほどつまらないものはない。こんなところに来て辛苦するのがまちがつておつた。」「何を言うんだ。高田君の妻君など見よ。子供三人もつれて、あの難しい姑をもつて、不平一つ言わないで、働いている。新しい着物なんか着ているのを見たことがない。高田が言つておつた。『もう来てから七年になるが、一枚の着物も出来ん。妻は、古いのを出しては、洗張りしてどうやら繕つている。気の毒だが俺には今どうも出来ん。すまんなあと言つても「どんな辛苦でも致します。子供を立派に育てましょう。』」と言つて、あんなに苦勞をしてくれる。僕は、感心して泣されるよ。』」と言つていた。貴様たちもあの妻君の爪なりともらつてるので、心を入れかえたらどうだ。」「そんなに高田さんの奥様がよかつたら、妾はか

へりますから、あの方をもらいなさい。」「何だ、今一度言え。太いことを言う奴だ。」と火箸が飛んで妻君の体にあたる。ワット泣き出した妻は、何時もする様に小言を言いながら、荷物をかたづけはじめた。それでも、帰りもしないで、その夜は明けた。男は又朝早く商売に出たが、妻君は、一日中、ねたり起きたりしていた。

愛の殿堂を築きなさい。そして、それを破るものは怒りです。

体立ち易い人たちは、勝手な人たちです。気儘な人である。人が悪いと思うとき、自分の思う様にならないとき、瞋恚の炎は燃えたちます。

人は悪くはなくても、自分のしたいことは善くなくても、思う様にならない時には、怒るのです。怒る心、体を立てるその心は、自分の心です。人が悪くも何ともありません。他人が悪いのではなくておこる、自分の心が悪いのです。人を教える道にあるもので、最も苦しむのは、女子の教育です。何故女子を教えるのは難しいのでしょうか。女子は怒りやすいからです。唯の一口の言葉でも、男子に取っては何でもないことが、女子にはすぐ体立ちの種になります。

道に石が一つころがついています。甲はそれを見て綺麗な石があると思います。乙はそれを見て、あんな石を庭にすえたらと思います。丙は、それにつまづきました。そして、歩くのに邪魔になる石だと思えます。甲乙丙に取って、決して、別の石ではありません。石は同じでも、その見る人の心によつて、善くも悪くも見えてきます。

我々の体を立てていることには、そんな場合がたくさんあります。怒ることは絶対に善くありません。怒つて悪いと見えるのは、悪いと思う者が悪いのではなくて、怒る自分が悪いのです。如何なる場合にも、怒ることは悪いのです。怒りは、全体を真実に見ることのできない不完全なる人間であるがためと、自分の感情を制することのできないためであります。

我々は、まず、我々の家庭、我々の周囲を愛の殿堂とせなければなりません。私達、結局の幸福は、愛と、努力より外に見出すことはできません。が故に、神聖純潔なる愛で固めた理想郷の建設に努力しなければなりません。世の中で最も不幸なる者は、夫婦であつてその間に何物をもゆるす、如何なる犠牲をもちらう熱烈な純潔な恋愛のない人たちであります。妻は夫を敬まわなければなりません。夫は、妻の人格を重んじ、同情しなければなりません。妻は夫の活動のためには如何なる辛苦も忍ばなくてはなりません。夫は妻の功労を認めて信頼しなくてはなりません。かくして、夫は妻と異体同心、二つであつて二つでない。愛の尊さによつて、融和合体して、人生の理想に、努力的な生活に突き進まなくてはなりません。

そこらあたりにころがつている夫婦達、夫は妻をいじめ、妻は夫を疑い、三日に一度、五日に一度、夫もくわれない夫婦喧嘩に花を咲かせる夫婦たち、どこに、人生生活の意義がある。生活の改造はまずその醜い夫婦の間からなおして行かなくてはならない。

最も不幸なるものは、親子の間である。親としての愛を子供に知らしめずして、子を育てた親である。生んでくれ、育ててくれ、教育してくれた親の恩をも考えずして、親を思わない子達である。「子を持って知る親の恩」、狂風には、まだ子がないけ

れど、もし、他人の子なら一日中、守りをさせられたらどうだろう。出来ると思うがまちがいである。愛情が続くと思うがちがつている。真実絶対の愛ならこそ、「はえば立て、立てば歩めの親心、我身につもる老いを忘れて」乳じゃ着物じゃ暑い寒いと育てて行かれるのだ。その親子の間に波風の立つほど、哀れな不幸がどこにあるぞ。親の愛にくもりが来たり、理知の明を失つたために、子供が親の愛を知らなかつたら、親の人生に於ける意義はなくなってしまう。

「兄弟は他人の始り」何たる悪いことわざだろう。一つ乳房をくわえ、同じ親に育てられた兄弟が、相い助け相い愛せないで、どこに清い人情があるろう。源氏を見よ。三代にして亡んだ。頼朝に、義経、範頼を信ずる度量があつたなら、必ず北條の天下にはならなかつたろう。弟は大臣となり、兄は田を耕しておつても、兄弟は兄弟である。相たすけ、相誠めて、家門の繁榮を計らなければならぬ。

あなたには、真実の友がありますか。金をもつて行つても、権力をもつて行つても破ることの出来ない愛で固まつた親友がありますか。ある人は幸福です。酒や食物で出来ている友は、財布加減でどんなにもなる安っぽい友達です。たのむに足りません。真実の友がない人があるでしょう。なくても仕方ありません。唯、しかし、私たちには光明団があります。

愛の殿堂を焼き亡ぼすものは怒の炎であります。小さな誤解から生ずる怒りであります。怒る心のおきた時、私たちは、静かに強く考え忍ばなければなりません。何が故に体を立てているかを静か考えた時、逆上^{のほせた}た頭の血は必ず下りてきます。私たちは、体の立つた時、何もしてはなりません。何も言つてはなりません。ただ、強く自ら忍ばなくてはなりません。体立つ心にまかせて、言葉に出し、行いに表せば、その後には激しい後悔があらわれて来ます。

清い月も、出て来る黒雲に真如の光をかくします。愛の生活も怒りの心に光を失います。私たちは怒る心と戦わなければなりません。

努力的な生活(二)

理想

人間である以上、誰にでも今の自分に満足することが出来ないで、もつと善くならう、不完全なる自分に飽き足らないで、もつと完全なる者になろうと思うものであります。現在の自分に満足が出来ないで、何によらず、こんなになりたいと思うその目的を理想と言います。

私たちに、人間であるわれわれには、みな理想があります。理想は、我々人間にあたえられたる事柄であります。人間にのみあたえられたるものであります。理想があるが故に、人間は苦しまねばなりません。理想があるが故に、人間は苦しまねばなりません。理想あるがゆえに進歩があります。我々青年には燃える様な理想があります。理想は青年の持つ宝であります。(一体に理想とは道徳的に用いられる言葉ですけれど、ここでは通俗な意味で、我々の目的に対する観念全部の意味に取つておきます。)

理想は私達の前途に対する目的でありますから、前途に理想のあることは、即ち、我々に光明の見えることであります。人間には皆理想があります。そして青年(年の若いのみが青年ではありません)には最も大なる理想がありますから、青年こそは最も大なる光明の持ち主であります。私たちは理想を一時でも曇らせてはなりません。理想を追うて苦しまねばなりません。楽隠居の夢を見てはなりません。

家庭の面白くない人は、家庭を円満に、極楽にしたいと望みなさい。田が三反しか7ない者は五反にして見せると誓いなさい。蔵のない者は土蔵を立てたいと望みなさい。成統の悪い五十番六十番の学生は、三十番に上らなければ学校を止めると血書なさい。夫の不身持なのを心配する妻は、夫の心を入れかえさすと目覚めなさい。体の弱い人は、丈夫になりたいと心から希いなさい。

自分の身についてよく知っているあなたが、真に心から望めば、出来ないことはありません。断じて申します。光明の生活は理想の生活です。つまらない喧嘩に花を咲せるひまのある人たちは、何故、一家全体の理想をお立てにならないのです。並んだ馬は横を見るから蹴りはじめめるのです。一緒に目的に走らせたなら喧嘩などするひまがありませんか。前途に光明のある人は、たとえ六十になつても青年です。年は二十でもそこらにころがつている様な、温いところ、涼しいところ、甘いもののあるところ、楽の出来るところと、さまざまいぶらつき歩く者たちほ、若年寄で青年ではない。何で、光明の生活者だろう。今ここで、卒然として我にかえり、巖然として自ら顧み、夢と暮し、夢と覚める生活から救われなければならぬ。